

**題名：オリンピックツリー**

あらすじ：「何をやってもものろまな女の子が、4年に1度だけ花が咲き実のなるオリンピックツリーの金の実を食べて、なりたいものになるお話」

作者：野々草 かおる

登場人物：ノドカ 11歳  
ミチカ 妹10歳  
お母さん  
おじいさん  
おばさん  
小学校の先生  
少年A, B, C  
少女A, B, C, D  
鳩  
カラス  
オリンピックツリー

## 場所：森林公園

少年達がボールで遊んでいる。

ノドカがそこを足早に通り過ぎようとする少年Aがノドカに気が付く。

少年A 「あ、のろま菌がやってきたぞ！」

少年Aがノドカにボールを投げつける。

腕にボールをあてられたノドカが少年達の方を見る。

少年A 「のろま菌をやっつけようぜ。」

少年達がノドカを取り囲む。

少年B 「よーし、いくぞ、のろま菌」

ボールを拾って、少年Bがノドカにボールを投げつける。

ノドカの頭にボールがぶつかる。

少年B 「あんなにゆるい球を避けられないなんて、本当にトロイよな。」

少年Cが投げたボールが今度はノドカの背中にあたる。

あたりが突然暗闇に包まれ、大粒の雨がザーザーと音を立てて降り出す。

少年A 「雨だ。」

少年B 「帰ろう。」

少年C 「じゃあな。」

少年達は走り去る。

雨の中一人取り残されたノドカは、泣きながら公園の小さな森の中に入っていく。

高い木々の上の方で幾重にも重なり合う沢山の枝と枝に生い茂る葉っぱが雨避けになり、森の木々の下でノドカは雨宿りすることができた。

暫く雨宿りをしたら、雨は止み日が照ってきた。ノドカも泣き止む。そして、鼻をクンクンさせる。

ノドカ 「なんだかいい匂いがする。爽やかな匂い。森の匂いだ。」

ノドカは何度か深呼吸をする。

ノドカ 「すーはーすーはーすーはー」

ノドカのちょうど目の前の太い木の幹を見ると、固い木肌の模様が顔のように見えてきて、更には微笑んでいるように見えてくる。

ノドカもつられて微笑む。

ノドカ 「またね。」

ノドカが歩き去る。

それからノドカは放課後毎日森林公園に行って、森の中をお散歩するようになった。

最近は暖かくなり、木の枝には色とりどりの花が咲き出していた。

ノドカは以前雨宿りをした大きな木の前で立ち止まり、木に話しかける。

ノドカ 「こんにちは、お花、綺麗ですね。」

男の声 「ああ、もう少ししたら満開になるよ。」

ノドカ 「木がしゃべった。」

太い木の幹の後ろから、黒紫色の薄い着物を着て、白いあご髭を生やしたおじいさんがひょっこりと現れた。

ノドカ 「あれ、よく公園のベンチに一人で座って、居眠りしているおじいさんじゃない？」

おじいさん 「ははは、そうだよ。」

ノドカ 「おじいさんもお花を見に森の中に来たの？」

おじいさん 「そうだよ。この森の中でこうやってお花を見たりしていると、心が安らぐからね。」

ノドカ 「おじいさんもそうなの？ 私と一緒にだね。私もここに来るとなんだかホッとするの。心が痛くて苦しい時も森のいい匂いを胸いっぱい吸い込むと痛みが少しずつなくなっていく感じがするの。それに、森の木皆がニコニコして、ここにいていいよ、って言ってくれている感じがするの。」

おじいさん 「樹木が自分を守る為に発している殺菌作用のある物質が、人間にはリラックス効果があるのだよ。だから、森の空気を吸うと気分が安らぐのだよ。」

ノドカ 「そうなんだ。おじいさん、物知りだね。」

おじいさん 「まあね。お嬢ちゃんは、この木の名前を知っているのかい？」

ノドカ 「オリンピックツリー」

おじいさん 「じゃあ、なんでオリンピックツリーと呼ばれているのかも知っているかい？」

ノドカ 「え〜と、確かオリンピックが4年に1度だけ開かれるのと同じように、4年に1度だけ花を咲かせるからでしょう。」

おじいさん 「よく知っているね。」

ノドカ 「そんなこと、この街の人なら誰だって知っているよ。」

おじいさん 「じゃあ、この木に不思議な力があることも知っているかい？」

ノドカ 「不思議な力？」

おじいさん 「オリンピックツリーに花が咲いて実がなる時に、たま〜に金の実がなることがあるのだよ。」

ノドカ 「金の実？ 見たことないよ。」

おじいさん 「めったに金の実はならないからね。でも、もしその金の実を食べることができれば、自分のなりたいものになれるのだよ。」

ノドカ 「なりたいもの？」

おじいさん 「例えば、そうだね、あそこにいるカラスや鳩とか。」

オリンピックツリーの木の枝に留まっているカラスや鳩を指さす。

ノドカ 「え〜、カラスや鳩になんてなりたくないよ。」

カラス 「カーカーカー」

鳩 「デデッポッポー」

おじいさん 「そんな言い方は失礼だろう。あの子たちも怒っているよ。じゃあ、陸上競技100mのオリンピック選手になりたいとか。」

ノドカ 「別になりたくないよ。」

おじいさん 「そうかね。カッコいいと思うがね。ま、ともかく美人女優になりたいとか、大金持ちになりたいとか、流行りの、なんていうのかね、ユーなんとか？ あ、そう、そう、ユーチューバーになりたいとか、なんかないのかね？」

ノドカ 「うーん、なりたいものね。なんだろう？ 何になりたいのかな？ 自分でもよくわからない。」

おじいさん 「そうだ、お嬢ちゃんは公園で男の子達によくいじめられているから、強いプロレスラーやボクサーというのはどうかね？ いじめられたら、素早い動きでやり返してやれ。」

おじいさんは、シュッシュとパンチを繰り返すジェスチャーをする。

ノドカ 「うーん、気が進まない。人の事殴るなんて恐ろしくて考えられないよ。」

おじいさん 「じゃあ、そうだな、腕力を振るいたくないなら、口で相手の弱点をついて、あいつら皆やっつけてやれ。そうだ、弁の立つ弁護士とか検察官になるとかいうのもいいぞ。」

ノドカ 「うーん、言葉だってパンチ以上に人を傷つける事があるから、それもやっぱり気が進まない。」

おじいさん 「やれやれ。やられっぱなしでもよいのかね。」

ノドカ 「うーん、心や体が傷つかないように守ってくれる盾とかバリアとかあるものが良いかも。」

おじいさん 「攻撃が1番の防御なのだが仕方ないな。そうか・・・貝やヤドカリや亀、デンドンムシとかああいうものか？」

ノドカ 「うーん、でもそれだと体は守れても心は守れないよ。」

おじいさん 「そうだね。」

ノドカ 「おじいさん、ありがとうございます。色々お教えてくれて。何になりたいかはまだわからないけれど、私、金の実を探してみます。」

おじいさん 「そうかね。それならオリンピックイヤーの今年がチャンスだぞ。今年は何の実がなりそうだと、オリンピックツリーが言っていたぞ。」

ノドカ 「おじいさん、オリンピックツリーと話せるの？」

おじいさん 「ああ、実は最近話せるようになったのだよ。」

おじいさんは自慢気だ。

ノドカ 「ええー、おじいさん、木とお話できるなんて、すごいね。私もお話ししたい。」

女の人の声 「お父さん！」

おばさんが木の陰から現れる。

おじいさん 「やれ、やれ、迎えがきたようだ。」

おばさん 「お嬢ちゃん、ごめんね。おじいちゃんね、ちょっとボケがきているから、木と話せるのかなんとか訳の分からない話は信用しないぞいてね。」

おじいさん 「いや、私は本当に木と話せるようになったのだよ。それで、不思議な力の話も教えてもらったのだから。」

おばさん 「またそんなこと言って。それより、お父さん、一人で勝手に家を抜け出さないでと、あれほど言ったのに、また抜け出して。まあ、大体行先はいつものこの公園だと察しはついてはいたけれどね。でもね、今日は、ものすごく心配したのよ。明日から入所する施設が嫌で、本当に家出でもしたのかと思って。」

おじいさん 「すまなかった。すまなかった。いや、ちょっとオリンピックツリーにお別れを言いに来てただけなんだ。すぐに戻るつもりだったのだよ。」

おばさん 「あら、あら、そうだったの。お父さんはこの木が昔から大好きだからね。私が小さい頃もよくこの森に連れてきてくれたよね。」

おばさんがオリンピックツリーを仰ぎ見る。

おばさん 「ずいぶん立派な木になって。」

おじいさん 「さようなら、オリンピックツリー」

オリンピックツリーの葉っぱがそよ風に揺られてサワサワと音を立てる。

おじいさん 「さようなら、お嬢ちゃん。」

ノドカ 「さようなら。」

おばさんはノドカに軽く会釈をして、おじいさんを連れて去っていく。

数日後オリンピックツリーの花は満開となり、森林公園はお花見にきた沢山の人々で賑わった。

それから、花は散り紅葉の季節となる。オリンピックツリーには薄茶色のしっかりした殻で覆われた木の実が沢山なりだしていた。

ノドカは放課後毎日オリンピックツリーの木の下に落ちた実を一個一個拾っては、金の実を探した。

しかし、毎日毎日探しても金の実は見つからず、ノドカは探し疲れてきた。

ノドカ 「オリンピックツリーさん、金の実はなったの？ 全然見つからないのだけれど。」

オリンピックツリー 「金の実なったよ。」

ノドカ 「木がしゃべった！」

ノドカはまたおじいさんが木の後ろから出てくるのではないかと木の後ろに回ってみたが、誰もいない。

ノドカ 「オリンピックツリーさん、金の実がどこにあるのか教えてくださいませんか？」

オリンピックツリー 「えーとね、1番上の右側の枝になっている実が、金の実だよ。」

ノドカ 「あんなに上の方にある実がそうなの？ まったく届かないよ。これは無理だよ。」

オリンピックツリー 「大丈夫だよ。ちょっと待っててね。」

鳩 「デデッポッポー」

鳴きながら飛んできた鳩が、その右側の枝になっている木の実をつついて落としてくれた。

ノドカはその木の実を手で拾ってよく見てみると、殻の割れ目から少し覗いている中の果肉が、キラキラと輝く金色に光っていた。

ノドカ 「金の実だ！ オリンピックツリーさん、ありがとうございます。鳩さん、ありがとうございます。」

オリンピックツリーの木肌が微笑んだ。

ノドカは大事にその金の実をハンカチに包んでポケットの中に入れて、家路についた。

## 場所：ノドカの家

ノドカが晩ご飯を食べている。

母 「いつになったら、ご飯が終わるの？ 片付かないでしょう？ もうちょっと早く食べられないの？」

ノドカ 「モグモグモグ ごめんなさい。」

母 「まだ明日の学校の用意だっしてないのしょう？」

ノドカ 「モグモグモグ まだ」

母 「ミチカはもうご飯食べる前に予習も復習も明日の学校の準備も終わって、ご飯食べ終わって、お風呂入って歯も磨き終わっているというのに。なんで姉妹なのにこんなに違うのかしら。それもミチカのほうが妹だというのに。ノドカはお姉ちゃんなのだから、もうちょっとちゃんとしていても良いのに。」

母は明日の準備のためにノドカのランドセルから今日使った教科書やノートを出している。ミチカがお風呂から上がってくる。

ミチカ 「お母さんがそうやってなんでも手を出すから、いつまでたってもお姉ちゃんは何もできないのよ。」

母 「だって、この子がやるのを待っていたら、明日になってしまうもの。」

ミチカ 「お母さんは毎日遅くまで働いて疲れているのだから、お風呂でも入ってきて。私がお姉ちゃんの明日の学校の用意をするから。」

母 「ありがとう、ミチカ。助かるわ。」

ボトン（物音）がする。

母とミチカが音の方をいっせいに振り向く。

ノドカ 「ご、ごめんなさい。お皿を片付けようと思ったら、手が滑って・・・。」

母 「もう、いったい、何をやっているのよ！ 余計な仕事ばかり増やさないでちょうだい。絨毯にシミがついちゃったじゃない。」

母はため息をつきながら雑巾で絨毯についたシミをこすりだす。

ノドカ 「ごめんなさい、私やるから。」

母 「もう拭き終わったわよ。いつもやるのが遅いのよ。ミチカを見習ってもっとさっさと動くようにしないと。食べ終わったのなら、明日の用意でもしておきなさい。お母さん、お風呂入ってくるわね。」

ミチカはノドカのランドセルに教科書やノートを入れ出す。

ノドカ 「いいよ、私がやるよ。」

ミチカ 「いいから、私がやった方が速いから。お姉ちゃんは何か他の事、そうだ、歯でも磨いてきたら？ 歯磨きは私が代わりにやってあげられないからね。それにしても、うちはお父さんがいないから、お母さんがお父さんの分まで毎日働いて頑張ってくれているのに、お姉ちゃんはずいぶんお母さんの仕事増やしてばかりだね。お姉ちゃんがいなくなれば、お母さんはきっと楽になるだろうね。」

ノドカ 「.....私.....い、いないほうがいいのか？」

ミチカ 「お姉ちゃんがいなくなれば、お母さんはずいぶん楽になるだろうなって思っただけ。はい、用意終わったわよ。私も寝るからね。おやすみなさい。」

ノドカ 「おやすみなさい。」

ノドカが電気を消して部屋が暗くなる。

ノドカ 「私、うちにはいないほうがいいんだって。すごく悲しいよ。」

薄暗闇の中、ノドカはポケットに入れていた金の実を取り出して、金の実に話しかけながら皮を剥く。

ノドカ 「綺麗、キラキラ輝いて、まるで希望の光みたいだね。私ね、なりたいものが、わかったよ。ここではないんだね、私の居場所は。私がなりたいのは.....。」

ノドカは、皮が剥かれた丸い金の実を少しずつ食べだした。

## 場所：校庭

オリンピックツリーの金の実を食べた翌朝、ノドカが登校する。

校庭で生徒達がお互いに朝の挨拶をしている。

少年少女達 「おはよう！」 「おはよう！」

少女A 「あ、のろま菌だ！」

ノドカ 「お、おは、」

ノドカは「おはよう」と言おうとしたが声が出ず、代わりにオリンピックツリーの花が口から出てくる。

ノドカも少女もびっくりする。

ノドカが更にしゃべろうとすると花が口から次から次へと出てくる。

オリンピックツリーの色とりどりの花が空中をフワフワと舞いながら校庭に落ちていく。

少女B 「うわ～、お花が口から出ている。」

少女A 「信じられない！すごく綺麗！」

少年B 「すごい、のろま菌が花を口から出しているぞ。」

少年少女達がノドカの周りに集まってくる。

少年A 「すごい！すごい！」

皆が喜んで花を拾いだす。

ノドカも皆が喜んでくれるのが嬉しくて、一生懸命に花を出していく。

少女A 「私、赤い花がいい。赤いの出して。」

ノドカは赤い花を出す。

少女B 「あ、ずるい、私は青い花を出してほしい。」

少女C 「私は黄色！」

少年A 「俺は緑がいいな。」

少年B 「僕は渋い黒がいいな。」

ノドカは喉の使い過ぎで喉が枯れてしまい、花が出なくなってしまう。

少年A 「なんだよ、俺の緑がまだ出ないんだけど、早く出してよ。」

少年B 「僕の黒は出してくれないの？」

少女D 「私もほしい。何色でも良いから出してよ。」

皆が口々にわめき出す。

ノドカも必死になるが、花を出すことができない。

少女A 「なんだ、もう出せなくなったんだね。」

少年A 「つまんない。もう行こう。」

少年少女達 「行こう、行こう。」

ノドカの周りから少年少女達がサーッと波が引くようにいなくなり、ノドカは一人校庭に取り残される。

ノドカは力なく校庭にうずくまると、その姿はいつのまにオリンピックツリー木の実に変わった。木の実はライチのような地味な茶色でしっかりした殻で覆われていた。

## 場所：教室

先生 「おはようございます。」

少年少女達 「おはようございます。」

先生 「あら、ノドカちゃんがないわね。誰かノドカちゃんの事知りませんか？」

少年A 「さっきまで校庭にいたよ。」

先生 「校庭のどの辺にいたの？ 案内してちょうだい。探しに行くわ。その間皆さんは、この問題を解いていてください。」

少年少女達 「は～い。」

先生と少年Aは教室を出る。

## 場所：校庭

先生 「ノドカちゃん、ノドカちゃん、いないわね。本当にこの辺にいたの？」

少年A 「はい。この辺で口から花を出していました。」

先生 「花？」

先生は怪訝そうな顔をする。

少年A 「あれ、こんなところに木の実が落ちている。ここはノロマ菌が立っていたところだ。もしかしたら、ノロマ菌、木の実になっちゃったのかな。」

先生 「木の実に？ 何バカなことを言っているの？ 本当にどこに行ってしまったのかしら？ 体調が悪くなって帰宅したのかしら？ 心配だわ。先生はこれから職員室に行って、ご自宅に連絡してみるわ。あなたはもう教室に戻りなさい。」

少年A 「はい。」

二人は校舎に向かって歩き出す。

下校時間が過ぎても木の実は校庭に取り残されたままだった。

そこに、大きなカラスが飛んできた。

カラスは木の実を鋭い口ばしでつつきだした。

ノドカの心の声 『やめて、やめて。殻を壊さないで。』

カラスは木の実の殻を細かく砕いて取り除き、中の実を器用につまんで食べてしまった。

ノドカの心の声 『体が散り散りになってしまった。どうになってしまうのかしら？周りの実もだんだんと溶けていっている。』

カラスはねぐらの公園の森に飛んで行き、オリンピックツリーの木の枝に留まる。

カラス 「カーカーカー」

カラスはオリンピックツリーの木の下にポトンと糞を落とした。

ノドカの心の声 『あ、外に出られた。』

ノドカはカラスのお腹の中で消化されずに種となって残っていたのだ。

そして、今、その種、ノドカは糞に混じって地面に落ちて、土に根付いた。  
ノドカの心の声 『新しい居場所だ。』

## 場所：20年後森林公園

ノドカが小さいオリンピックツリーになって立っている。

公園で少年達にいじめられている女の子が見える。

少年達 「やーい、ノロマ菌、ノロマ菌」

ノドカ 「あの女の子、またいじめられているね。昔の私みたい。」

隣の大きなオリンピックツリー 「そうだね。」

ノドカ 「あの時の苦しかった気持ち、もうかなり忘れてきているよ。」

オリンピックツリー 「そうだね、これからもっと忘れていくよ。私達の寿命はなん百年、何千年とあるからね。」

ノドカ 「なんであんなにノロマなことを悩んでいたのかも、よくわからなくなってきているよ。」

オリンピックツリー 「そうだね、人間達は急ぐことが大好きだけれど、私達は別にそういう事に興味がないからね。」

ノドカ 「私にはこちらの方が時間の流れがゆるやかで合っているみたい。」

オリンピックツリー 「そうだね、なんだか伸び伸びしているね。」

ノドカは思いっきり青空に向かって伸びをする。

ノドカ 「太陽の光が気持ち良いね。」

オリンピックツリー 「そうだね。」

公園で少年達にいじめられている女の子のお母さんが娘を助けに現れた。

お母さん 「ちょっと、あなたたち、やめなさい！」

女の子 「お母さん！」

少年達 「うわー、怖いおばさんが来たぞ〜。」

少年達は走り去って行く。

お母さん 「ほら、帰るわよ。ぼーっとしてないで、さっさと歩きなさい！」

お母さんは女の子の腕を掴んでグイとひっぱる。

女の子 「はい。」

お母さん 「お母さんもお父さんもテキパキしていて、やる事早いのに、なんでこんなにノロノロした子供が生まれたのかしら。なんだか昔行方不明になったお姉ちゃんの事を思い出すわ。嫌だわ、これも遺伝なのかしら？」

ノドカ 「あら、あのお母さん、妹のミチカだわ。あの女の子、ミチカちゃんの子供だったのね。知らなかった。」

オリンピックツリー 「あのいつもいじめられている女の子が君の姪っ子だったとはね。気が付かなかったよ。」

ノドカ 「あの女の子、森の中に来ないかしら。そうすれば、私達の力で心の痛みを

少しでも和らげてあげられるのに。」

オリンピックツリー 「そうだね。それに今年はオリンピックイヤーだから、私達に金の  
実がなるかもしれないよ。」

ノドカ 「あの女の子も木になった方が幸せかもしれないから、チャンスの年という  
ことね。」

オリンピックツリーとノドカは静かに微笑みあった。

おしまい